様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２２ 日現在

機関番号：１８００１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５９３３００

研究課題名（和文）孫育て世代に対する包括的な健康支援の検討－孫育てにかかわる心身の負担の検討－

研究課題名（英文）Psychosomatic burden on grandchild care on the generation of grandparents

研究代表者
遠藤　由美子（ENDOH, Yumiko）

琉球大学・医学部・准教授

研究者番号：９０２８２２０１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,300,000円、（間接経費）　990,000円

研究成果の概要（和文）：孫育てに関わっている祖父母の育児支援状況と身体活動量，心身の健康の実態を明らかにするため，中高年者を対象に質問紙調査または身体活動量測定を行った。その結果，孫の育児支援を行っているのは母方の祖母が多く，孫の自宅から車で30分以内の近距離に居住していた。未就学児への育児支援で頻度が多かったのは，食事や排泄の世話等の直接支援であった。また，育児支援を行っている祖父母の心身の健康状態はおおむね良好であった。高強度の身体活動を行っているものは少なかったが，60，70歳代祖母では育児支援を行うことが身体活動量の増加や健康関連QOLの良さにつながっている可能性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：I performed inventory survey and examination of the physical activities to the grandparents for clarifying the actual state of grandchild care, physical activities and psychosomatic health status. As a result, there were many ratios that one's maternal grandmother made the child care support to the grandchild. And the grandmother lived in the short distance within 30 minutes by car from the home of the grandchild. They performed much frequency direct support such as the care of the meal or the diaper exchange to preschool child. In addition, they had good mental and physical health condition. There were few vigorous-intensity physical activities of grandmother. However, for a grandmother in her 60s or 70s, it was suggested that the participation in child care increased physical activities and improved health-related QOL.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：孫育て　祖母　身体活動量　健康

１．研究開始当初の背景

祖父母は子育て支援における支援資源として注目され，近年，孫育てに関わる祖父母に対する支援プログラムが盛んに提供されるようになっている（鶴川　2005，角川 2008，日本助産師会　2010a）。中でも代表的なのは，日本助産師会が平成 22 年 3 月に発行した孫育て講座テキスト「おまごBOOK」（日本助産師会　2010b）がある。このテキストはマスコミに取り上げられた他，子育て中の両親や祖父母からの問い合わせが相次いでおり，一般社会の孫育てに対するニーズの高さを示している。孫育てにより祖父母は「癒し体験」や「いきがい」などの肯定的側面を経験する一方で，育児を「重荷」とするネガティブな側面を経験する（久保ら 2008）。

一方，孫育てに関する研究は，祖父母の育児経験で培われた「祖父母力」を子育てに活用することを主眼とした視点が主流である。また，支援プログラムの内容は育児の知識・技術の提供や，祖父母間の孫育て経験の共有が中心となっており，孫育てで経験する育児負担に対する支援プログラムはみられない。孫育てに関わる祖父母は，更年期症状や加齢に伴う健康問題が生じてくる中高年であり，こどもの親世代と同等の育児支援をすることは心身ともに負担が大きいことが予想される。しかし，その心身の負担について，どの程度の身体活動を行い心身の疲労を自覚しているかに着目した研究はほとんどない。

このような背景から本研究の着想に至った。

２．研究の目的

本研究では，孫育てに関わる中高年者を対象に孫育ての実態と孫育てにかかわる祖父母の身体活動量および心身の健康の実態について明らかにするため，調査を行った。本研究結果により，孫育てに関わる中高年向け包括的健康支援プログラム策定にむけた基礎資料を得ることを最終目標とした。

３．研究の方法

（1）平成 23 年度

①研究 1　祖母の育児支援行動と母親の満足感に関する調査

沖縄県内の 1 歳 6 か月健診を受診した児の母親 554 名と祖母 447 名を対象に，無記名自己記入式質問紙調査を実施した。調査地域は沖縄県本島の全市町村から層化 2 段抽出法により 2 市 1 町を選定した。健診の待ち時間に母親へ調査説明を行い，質問紙を配布した。祖母へは，直接または母親を介して配布を行い，母親，祖母とも郵送法により回収した。回答が得られたもののうち，無効回答を除いた母親 92 名（33.3±4.5 歳），祖母 76 名（61.8±7 歳）を分析対象とした。

②研究 2　孫育てに関わる中高年女性の育児支援と心身の健康に関する調査

沖縄県内在住の保育園児（0～5 歳児）の育児にかかわっている祖父母 672 名に対し，保育所を通じて質問紙を配布し，郵送法で回収した。調査施設は沖縄県本島内の認可保育所，認可外保育所のリストより無作為抽出を行い，10 か所を選定した。回答が得られた 202 名(祖母 193 名，祖父 9 名，61.8±7.2 歳）を分析対象とした。

（2）平成 24 年度

祖父母の孫育児支援プログラムに対するニーズ調査

本研究の最終目標である孫育てに関わる中高年向け包括的健康支援プログラム策定にむけた基礎資料を得るため，沖縄県内の老人クラブ連合会または社会福祉協議会運営団体に所属する 47 歳以上の男女 837 名を対象に，無記名自己記入式質問紙調査を実施した。調査地域は沖縄本島の全市町村から層化 2 段抽出法により選定した。質問紙回収は直接または郵送法で行い，　425 名（73.8±7.1 歳）から回答を得た(回収率 50.8%)。

（3）平成 25 年度

①研究 1　祖母の育児支援行動と身体活動量，健康関連 QOL の実態および孫の育児支援にかかわる祖母の健康関連 QOL の関連要因に関する質問紙調査

沖縄県内の保育所に通所する孫をもつ祖母（平均年齢 61.8±6.7 歳）を対象に無記名自記式質問紙法を実施し，郵送法で回収を行った。120 名（回収率 26.9%）より回答を得た。

②研究 2　孫育てが祖母の身体活動量にあたえる影響に関する調査

沖縄県内で孫の育児支援をしている中高年女性 55 人（60.9±5.7 歳）を対象に身体活動量測定調査を実施した。平日 5 日間の身体活動量測定を依頼し，測定は睡眠，入浴時を除く時間帯に加速度計（オムロン活動量計 Active Style Pro HJA-350IT ）を腰部に装着して行った。そのうち，対象者全員が測定を継続できた 4 日間のデータ分析を行った。

４．研究成果

（1）平成 23 年度

①研究 1

祖母の 43.4%が有職者で，母親の有職者は 55.4%，子どもの数は 1 人が 35.9%，2 人が 33.7%であった。育児支援にかかわっている祖母と母親の関係は，実母が 69.6%で，61.9%が孫の自宅から車で 30 分以内の距離に居住していた。孫との交流頻度は，毎日が 32.9%と最も多く，週に 2，3 回が 30.3%であった。祖母の育児支援参加得点が高かったのは，話しかけ，抱っこ，遊び相手であり，得点が低かったのは，寝かしつけ，掃除，入浴であった。母親の満足感が高かった項目は，孫の成長とともに喜ぶ，話しかける，抱っこ，遊び相手であり，直接的支援行動が上位であった。

②研究 2

有職者は 46.5%であり，孫の人数 4.6±3.2 人であった。育児支援をしている孫の平均年齢は，3.6±2.8 歳で，娘の子が 59.9%，息子の子が 40.1%であった。孫の家と自宅との距離は，車で 30 分以内の場所が最も多く 68.9%であった。毎日行っている育児支援は，一緒に遊ぶ，幼稚園，保育園の送迎，食事後の片づけであり，ほとんど行っていない育児支援は，物を買う，本を読む，病院への付添であった。国際身体活動質問紙表を用いた調査では，高強度の身体活動をしているものは 24.3%，中等度が 28.2%，歩行が 70.3%であった。一方，平日座っている時間は 1 日あたり 298.5 ± 256.9min/day であった。The subjective well-being inventory(WHO SUBI)による心の健康度は 39.5±6.5 点，心の疲労度は 54.1±5.3 点と両指標とも良好であった。

（2）平成 24 年度

孫がいるものは 85.6%で，そのうち孫の育児に関わっているものは 52.5%であった。孫の育児に関わっているもののうち，孫育児支援プログラムへの参加希望は 23.7%と少なかった。参加希望者の背景をみると，62%に未就学の孫がおり，77.6%が週 1 回以上の頻度で孫と交流していた。また，80%が孫と同居か，徒歩で往来または車で 30 分以内の近距離に居住していた。孫の育児で気になる項目は，「昔の育児が今も通用するのか不安」が最も多く，「自分の健康状態や体力に不安がある」，「自分が高齢」が続いた。孫育児支援プログラムで知りたい育児技術は，「事故防止や対処方法」，「習い事や教育」が多かった。参加希望者の自覚症状を有訴者数順にみると，「疲れやすい」が最も多く，次いで「関節の痛み」，「血圧が変動しやすい」が続いた。今回の調査結果から，孫育児支援プログラムの内容には，従来実施されてきた育児技術の知識提供だけでなく，祖父母の体調管理や体調・年齢に応じた育児参加のあり方についても検討する必要性が示唆された。

（3）平成 25 年度

①研究 1　週 1 回以上実施している割合が高い育児支援は，直接的（食事や排泄の世話等），社会文化的（一緒に遊ぶ等），家事的（食事作りや片付け等）であった。身体活動量が厚生労働省の推奨量未満である祖母は，40・50 代の群で 41.4%，60・70 代の群で 35.5%であった。年代別健康関連 QOL（SF-36）の比較では，60・70 代は 40・50 代に比べ「身体機能」「体の痛み」の QOL が有意に低く，身体機能・日常役割機能（身体）・体の痛み・社会生活機能の 4 項目で，国民標準値を下回る結果となった。健康関連 QOL の関連要因の検討では，40，50 代で未就学児のみの孫を世話している祖母は就学児の祖母に比べ「活力」の QOL が低く，「物を買う」育児支援を行っている祖母ほど「体の痛み」「活力」「社会生活機能」「心の健康」の健康関連 QOL が低かった。一方，60，70 代で直接的，社会・文化的，家事的育児支援を行っている祖母は「全体的健康感」「活力」「社会生活機能」の QOL が高かった（図 1）。また，身体活動量が多い祖母ほど「身体機能」の QOL が高かった。今回の結果から，40・50 代の祖母は 60・70 代の祖母に比べ有職者が有意に多く（68.3%対 38.5%），就業しながら未就学児の孫へ育児支援をすることは，心身の負担となっている可能性がある。 一方，60・70 代祖母では，孫の育児支援とそれに伴う身体活動量の増加が健康関連 QOL 向上につながっていることが示唆された。

②研究 2　対象者の 72.7%が 65 歳未満であり，65 歳以上が 27.3%であった。サークル活動に参加しているものは 56.9%，不参加 39.5%，不明 3.6%だった。育児支援をしている孫の数は年代による違いはなく，65 歳未満の 44.8%，65 歳以上の 57.2%が 3 人以上の孫の育児支援をしていた。加速度計の装着時間は，846.5±128.0 分／日（Mean±SD）であった。

| | 育児支援行動＼健康関連QOL | 全体的健康感 | 活力 | 社会生活機能 |
|---|---|---|---|---|
| 直接的 | 着替 | 0.274** | 0.216 | -0.013 |
| | 排泄の世話 | 0.295** | 0.301* | 0.100 |
| | 食事介助 | 0.279** | 0.153 | 0.040 |
| | 入浴 | 0.349** | 0.086 | -0.021 |
| 社会文化的 | 一緒に遊ぶ | 0.365** | 0.301** | 0.272** |
| | 物を買う | 0.328** | -0.017 | 0.155 |
| | 本の読み聞かせ | 0.263** | 0.151 | 0.058 |
| 家事的 | 食事を作る | 0.304** | 0.072 | 0.146 |
| | 食事の後片付け | 0.246** | 0.097 | 0.003 |
| | 洗濯 | 0.289** | -0.046 | -0.122 |
| | 買い物 | 0.330** | -0.017 | -0.107 |
| | 掃除 | 0.329** | 0.058 | -0.028 |

Spearmannの順位相関係数 *p<0.05 **p<0.01

図1 育児支援内容別健康関連QOL《60-70代》

歩行と生活活動別に身体活動量をみると，年代による特徴が見られた。歩行の身体活動量は 65 歳未満が 1.4±1.5 Mets・時／日，65 歳以上が 2.1±2.6Mets・時／日で，65 歳以上の歩行活動量が有意に多かった。一方，生活活動では，65 歳未満が 2.5±2.3 Mets・時／日，65 歳以上が 1.4±1.1Mets・時／日で 65 歳未満が有意に多かった。65 歳未満の群では，育児支援をしている孫の数が多いほど歩行と生活行動の身体活動量が多くなったが，65 歳以上の群では育児支援をしている孫の数と身体活動量の関連はなかった。本結果から身体活動量は年齢が影響していることが明らかになったが，想定していた影響因子（孫の数）は，65 歳以上の祖母の身体活動量には影響していなかった。今回検討した祖母の年齢や孫の数以外の因子も身体活動量に影響していると考えられ，今後は支援している孫の年齢層や育児支援の種類との関連についても検討をすすめていきたい。

（4）研究成果のまとめ

様々な年齢層の孫をもつ祖父母に対し，育児支援，健康，身体活動量の実態調査を行い，以下の点が明らかとなった。

①祖父母の約半数が自身の仕事をもちながら，孫への育児支援をしている。孫の育児支援を行っているのは母方の祖母が多く，孫の自宅から車で 30 分以内の近距離（同居，2 世帯住宅含む）に居住している。小学校未就学児に行う育児支援で頻度が多いのは，食事

や排泄の世話等の直接的支援が多く，次いで一緒に遊ぶ等の社会文化的支援，食事作りや片付け等の家事的支援である。

②育児支援を行っている祖父母の心身の健康状態はおおむね良好である。強い強度の身体活動を行っているものは少ないが，60，70歳代祖母では，育児支援を行うことが身体活動量増加につながり，結果として健康関連QOL を良好に保つことに貢献していることが示唆された。一方，仕事をもちながら育児支援を行う 40，50 歳代祖母は育児支援が負担になっている可能性が示唆された。

今回の育児支援と健康,身体活動量の実態調査および育児支援プログラムのニーズ調査から，祖父母が良好な健康状態を維持しながら孫の育児支援に関われるプログラム内容として，育児技術の知識提供だけでなく，祖父母自身の健康状態に応じた育児支援参加のあり方についても情報提供する必要性が示唆された。

５．主な発表論文等
（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 4 件）

①Yumiko Endoh, Yoko Tamashiro, Fujiko Omine: Study of midwife care during midwifery student training – from one-month postnatal examination survey. Joint Seminar on Public Health and Nursing. March 10, 2014, University of the Ryukyus

②遠藤由美子：孫の育児支援にかかわる祖母の身体活動量と心の健康．第 114 回　琉球大学保健科学研究会，西原町　1 月 11 日，2013

③ Yumiko Endoh, Fujiko Omine, Yoko Tamashiro, Sanae Yamaguch, Michiyo Kato: Support frequency and the meaning of child-care for grandmother having infants. The 44th APACPH Conference, October 13-18, 2012, Colombo Sri Lanka

④ Yumiko Endoh, Sanae Yamaguchi, Michiyo Kato: The experience of grandparents in grandchild care. International Hiroshima Conference on Caring and Peace, 24 March 24 2012, Hiroshima

６．研究組織

(1)研究代表者
遠藤　由美子（ENDOH Yumiko）
琉球大学・医学部・准教授
研究者番号：90282201

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし